
ウルトラマンコスモス クロスオーバーワールド

春風コンビ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウルトラマンコスモス クロスオーバーワールド

【Zコード】

Z5458Z

【作者名】

春風コンビ

【あらすじ】

パラレルワールド

それは、決して交わることのない並行世界。

だがある日、アマノ・ハルカという少女のウルトラマンに対する憧れを何者かに利用され、変わり果てたコスモスの世界へと連れてこられてしまう。

世界を元に戻すため、自分の世界に帰るため、コスモスとハルカの戦いが今始まる。

設定紹介

＜世界観＞

テレビシリーズのコスモスと同じの西暦2009年。
(テレビシリーズ同様に途中で2010年になる)

アマノ・ハルカはパラレルワールドからやってくる。

ハルカの住む世界は、コスモスの放映開始から10年が経った2011年。

コスモスは、パラレルワールドではテレビ作品、コスモス世界では現実に存在している。

コスモスはハルカにとつて憧れの存在。

＜登場人物＞

アマノ・ハルカ

16歳。

この物語の主人公。

10年前、コスモスをテレビで見てからウルトラマンが好きになる。好きなウルトラマンはコスモス、ダイナ、メビウス、ゼロ。コスモスがテレビ番組として存在する世界からコスモスの世界にやつてくる。

世界を元に戻すため、元の世界に帰るためにEYESに入隊する。

春野ムサシ

19歳。

この物語のもう一人の主人公。

コスモスと一体化しているEYESの隊員。

コスモス世界での8年前にコスモスと心を通わせた経験をもち、その時に約束した「真の勇者」になるために奮闘するが、コスモス世界に起きた危機を知り、世界を元に戻す戦いにも身を投じる。

ヒウラキャップ

33歳。

EYESの隊長。

考えるよりまずは実践派だがときには豪胆な一面を見せる。
本名は「日浦晴光」

シノブリーダー

28歳。

EYESの副隊長。元防衛軍だが一匹でも多くの怪獣を保護したい
という願いからEYESに入隊した。

パイロットとしても優秀。本名は「水木忍」

フブキ隊員

23歳。

シノブと同様に元防衛軍のパイロット。

ムサシとはよく激突するが怪獣保護という信念は同じである。

本名は「風吹圭介」

ドイガキ隊員

25歳。

自称天才科学者と言うだけあって博識で武器開発や作戦立案をする
が、臆病な一面もある。

本名は「土井垣浩次」

アヤノ隊員。

19歳。

ムサシの10ヶ月先輩。通信・分析オペレーターでEYESが所有
するハイエンドコンピューター「エイジヤーMAX」を使いこなす。
好奇心旺盛で子供っぽさを残すが子ども扱いされるのを嫌っている。

本名は「森本綾乃」

設定紹介（後書き）

このほかにも人物は出てきますがメインはこの7人です。正確にはコスモスも入りますが。

ほかは作品中で紹介していきます。

ダイナとメビウスも登場させようと思つています。
これからよろしくお願いします。

第1話「優しさと強さの英雄」（前書き）

今回より本編スタートです。

この物語は私の思い付きではじめました。
かなり長めになりましたが私のコスモス好きを分かってもらえれば
幸いです。

新参者ですが宜しくお願いします。

第1話「優しさと強さの英雄」

西暦2001年7月7日

その日は私にとつて忘れることが出来ない日だ。

忘れる事のできない理由はある英雄との出会いである。

その英雄は月の優しさと太陽の強さを兼ね備えた巨人、ウルトラマンコスモス。

それをきっかけに私はウルトラマンが好きになり、ウルトラマンダイナ、ウルトラマンメビウス、ウルトラマンゼロも好きになった。コスモスとの出会いから10年。2011年の今、当時6歳だった私は16歳になった。10年経った今でもウルトラマンに対する思いは変わらない。

私の名前は、アマノ・ハルカ。ウルトラマンに対する思いは誰にも負けない！！

今日も彼女はコスモスのDVDを見ていた。

「いつ見てもコスモスは最高だ。」

コスモスはTVシリーズが始まつてから10年が経ちその記念にメモリアルDVD - BOXが発売されていた。

コスモスはこれまでのウルトラマンと違い、怪獣と可能な限り戦闘を避け、怪獣保護チームであるTEAM EYESと共に保護する。そこにコスモスの優しさが現れている。だが無慈悲な異星人や力オスヘッダーなどに対し、立ち向かうこともある。そんなコスモスとそれを支えるEYESにハルカは憧れていた。DVDを見終えたハルカは片付けながら呟いた。

「コスモスの世界に行けたらいいのになあ。」

コスモスの世界に行く。それは彼女の願いでもある。コスモスとEYESに憧れているからこそ、その信念に賛同している。彼女は、怪獣たちを保護したいとも願っている。

そんなこととは知らないコスモス世界では・・・。

ここはEYESの基地トレジャー・ベース。太平洋上に人工秘密基地として建造された。

基地には、人々の気分を落ち着かせてくれる自然が大量にある。春になれば、桜となつて心を癒してくれる。

指令室では、隊員たちが休憩していた。指令室は隊員たちのコミュニケーションの場となつてゐるため、全員が休憩をとることは珍しくない。

「久しぶりですね。こうして、お茶するなんて。」

そういうつているのはEYESの副隊長のシノブだ。

「まあここ最近は何かと忙しいからな。」

とEYESの隊長のヒウラが続けた。

ここ最近は、何かと忙しくなつてゐる。そのため、全員が指令室で休憩することがなかつたのだ。

「またジンクスじゃないのか?」

フブキが皮肉交じりに言つた。

EYESには変なジンクスがある。それは、誰かが入隊すると何かが起ころるというものだ。アヤノが入隊した時も大変なことが起き、ムサシが入隊した時にはカオスヘッダーに襲来されるという嫌なジンクスだ。

「いや誰も入隊してませんよ。」

とムサシが答えた。

ムサシはアヤノと同い年ではあるが10ヶ月後輩である。さらにムサシには、誰にも知られていない秘密がある。

ウルトラマンコスモスと一体化していることだ。リドリアスがカオス化してしまつた際にコスモスと一体化したのだ。

「でも、これから誰か来るかもしけないね。」

トイガキが予想して言つてみた。

「でも、これ以上のジンクスは嫌ですよ。ねえ。」

と全員に向かつて言つたのはアヤノだ。

すると全員が「うん。」と言わんばかりにうなづいた。

しかし、このところ世界に異変は起きている。

コスモスの世界にいるはずのない宇宙球体スフィアが確認されたり、検知されることのなかつた時空波が検知されたりしているのだ。それにカオスヘッダーも活動している。

これが、世界に危機をもたらしていることには誰も気づく由もなかつた。

ハルカの世界ではすでに夜になっていた。ハルカはすでに寝ていた。が、不思議な夢を見ていた。

ハルカは、歩いていた。どこと知らない場所を一人で。

「ここは一体？」

すると後ろから声をかけられた。

「アマノ・ハルカ」

ハルカは後ろに振り返った。すると、ウルトラシリーズの映画で見たことのある白いドレスに赤い靴を履いた少女が立っていた。

「君は、赤い靴の少女！？」

と驚きを隠せない表情で言つた。その少女は、それを気にもとめず

に言つた。

「あなたのことを必要としている世界があります。」

「私を必要としている世界？」

疑問気に聞き返した。

すると少女の顔が悲しげな顔に変わった。

「その世界は絶対に交わることのない世界が交わってしまっている。

そしてそれはあなたがよく知っている3つの世界・・・」

そう言われたハルカは思い当たるものがあった。だが、ハルカにはあり得ないことだった。

「まさか、コスモスとダイナとメビウスの世界の融合？」

しかし、少女は答えることもなく続けた。

「急いで。でないと世界が滅んでしまう……。」

「分かった。なら私は行くよ。」

そこでハルカは目を覚ました。すると、部屋の中に夢の中にいたはずの赤い靴の少女がいた。

「うわあー！」

驚いたハルカはベッドから転げ落ちてしまった。

「大丈夫ですか？」と少女が手を差し伸べてきた。

「ありがとう。」といつて立ち上がった。

「君は何者なの？どうして私なの？」

ハルカは疑問に思ったことを聞いてみたが少女は笑みを浮かべるだけで何も答えなかつた。

「さあ行きましょう。」と少女が言つと光の扉のよつなものが現れた。

ハルカは少女に導かれるままその中に飛び込んだ。

だが、ハルカは自分の思いが利用されたことに気づいていなかつた。

コスモスの世界も夜になり、ムサシたちも寝ていた。

このときのムサシは知らないことだがハルカと同じ夢を見ていた。ライトブルーの隊員服姿のムサシの目の前に赤い靴の少女が立つていた。

「君は？」

とムサシが聞いたが何も答えなかつた。すると少女が笑みを浮かべながら言った。

「ウルトラマンコスモス。この世界をよく知る少女が現れる。」

「君、どうして僕のことを？それにこの世界をよく知る少女って。」

「あなたよりこの世界を知っているわ。」

ムサシがコスモスであることには一切答えずと言つた。そこでムサシは目を覚ました。

「今のは何だったんだ？」

時計を見るとすでに朝になつていた。

とつあえず気持ちを落ち着かせたムサシは隊員服に着替えて部屋を出た。

朝食を食べたムサシはいつものように指令室に入った。

「おはようございます。」

するとフブキがムサシに詰め寄ってきた。

「ムサシーお前はお子ちゃまかー? 何時まで寝てる気だよー。」

アヤノとダイガキがつぶやいた。

「またやつてる。どっちがお子ちゃまなんだか・・・」

「うん。そういうフブキだつてさつき起きてきたばっかなのに。」

二人が話していたのが聞こえたのかフブキは口パクで「言つな。」と言つた。

「それにしてもどうしたんだ? ムサシが寝坊だなんて。」

ヒウラが聞いた。

「いや、ちょっとおかしな夢を見て。」

「おかしな夢?」

とシノブが聞き返した。

「ええ。随分とほつきりした夢でしたよ。この世界をよく知る少女が現れるって。」

「どういう意味なんだ?」

とヒウラが聞いた。

「僕にもよく分からないです。でも、最近起こってる異変と何か関係があるかも知れませんね。」

そういう終えた時、指令室に警報音が鳴り響いた。

ダイガキとアヤノがエイジヤーMAXを操作して状況を伝えた。

「瀬黒丘陵に怪獣出現!」

「10キロ先には、住宅地があります!」

「よし、TEAM EYES出動!」

「了解!」

格納庫では、出撃準備が行われていた。

EYESのライドメカにはコアテックシステムが採用されている。オレンジとシルバーのコアモジュールを核に前後にパーツを組み合わせることによりあらゆる場面に対応できる万能メカである。

フブキとヒウラが搭乗するのは前後に赤とシルバーを基調とするA 1、A 2パーツを取り付けた超高速機動型のテックサンダー1号。一方、シノブ、ドイガキ、ムサシが搭乗するのは前後にB 1、B 2パーツを取り付けた特殊保護機型のテックサンダー2号。このほかに前にA 1、後ろにB 2パーツを取り付けた特殊支援機型のテックサンダー3号、前にB 1、後ろにA 2パーツを取り付けた特殊高速機型のテックサンダー4号がある。

「テックサンダー1、オールチエックグリーン。」

「テックサンダー2、オールチエックグリーン。」

とヒウラとトイガキが伝えた。

「テックサンダー1、テイクオフ！」

「テックサンダー2、テイクオフ！」

30分ほどで現場にテックサンダー2機が到着した。

怪獣を見て、トイガキが記憶の中から名前を引っ張り出した。

「あー。あれはゴルメデですね。」

「ゴルメデ？」

とシノブが聞いた。

「ええ。以前SRCが捕獲に失敗した怪獣です。」

以前ゴルメデが出現した際、EYESの母体組織であるSRCが捕獲しようとしたのだがその凶暴性に捕獲することができなかつたのだ。

「トイガキ、例のエネルギー反応は？」

例のエネルギーとは、以前リドリアスを凶暴化させた光のウイルスのことだ。リドリアスに取り付く前には異常なエネルギーで街一つを壊滅させたほどであるために警戒しているのだ。

「カオスヘッダー反応はありません。」

「カオスヘッダー？」

とヒウラが聞いた。

「ああ。あれに名前をつけてみたんですよ。」

「カオスヘッダーか。」

それを見つめる少女がこの世界に辿り着いた。

光の扉の中からアマノ・ハルカが現れた。

「ここは？」

周りを見回すとハルカにとつて見覚えのある怪獣が目に入った。

「古代怪獣「ゴルメデ」!?」

そこで自分が今どの世界にいるのか理解した。

「まさかここはコスモスの世界!?」

しかしそれは有り得ないことだ。さっきまでハルカはコスモスがTV作品として存在する世界にいたのだ。

だがそのありえないは今、覆つてしまつたのだ。上空を見るとテックサンダーがいる。

「テックサンダーだ。ゴルメデを保護する気なんだ。」

シノブが異変に気付いた。

「キヤップ、地上に人が！」

「なんだと!? 逃げ遅れたのか?」

「僕が救助します！」

ムサシがすぐに答えた。

「この状況でどうやつて?」

「フブキ、ゴルメデをなるべく引き離すんだ。」

「了解！威嚇弾発射！」

1号機からゴルメデの足元めがけて威嚇弾が放たれた。その隙に2号機は、ハルカの近くに着陸し、ムサシが降りてきた。

「君、早くここから逃げるんだ。」

だがハルカは、田の前にムサシが現れたことに驚いていた。

「え、ムサシ隊員？」

ムサシは初対面のはずの彼女が名前を知っていることに驚いた。

「どうして、僕の名前を？」

すると近くに爆発がおこった。ムサシはハルカに覆いかぶさるよう

に伏せた。

「ありがとうございます。」

「早くここから逃げるんだ。この怪獣は僕らが保護する。」

「はい。この怪獣は凶暴ですからくれぐれも注意してください。」

ムサシは、多くの疑問を抱いたが気にすることなく現場に戻った。

2号機はムサシを降ろしたあとすぐに現場に戻っていた。1号機と共にムサシたちに向かわぬように威嚇射撃をしていた。

「皆、捕獲オペレーションスタート！」

捕獲オペレーションとは怪獣を捕獲するためにとるもののことだ。

「了解！ 麻酔弾発射！」

1号機から麻酔弾が放たれた。怪獣に命中し、地面につづくまつた。その隙に、ゴルメデ上空に2号機が滯空した。「レーザーネット発射！」

！」

2号機から水色のレーザーをまとったネットが放たれた。これは怪獣に危害を加えることなく捕獲できるものだ。

ゴルメデはネットに入れられたが抗うようにネットを破壊した。その衝撃に耐えられずに2号機が墜落してしまった。

それを地上で見ていたムサシはすぐに行動を起こした。

「リーダー、トイガキさん。くそっ！」

腰にホルスターされているラウンダーショットの前後にガンコニッシュを取り付けゴルメデに狙いを定めた。トリガーを引くと閃光弾が放たれた。

「ゴルメデ、こっちだ！」と言いつつ誘導弾を放った。

ハルカは墜落した2号機に向かっていた。

2号機のコクピットには気を失っているシノブとダイガキの姿があった。

「シノブリーダー、ダイガキ隊員大丈夫ですか？」

すると、2人は意識を取り戻した。

「あ、あなたは？」

「どうしてテックサンダーに？」

「説明はあとでします。今はここから脱出を。」

ハルカに言われるまま2人はハルカと共に脱出した。

「アイツ、1人で無茶しやがって。」

とフブキが愚痴をもらした。

「しかし、2号機が墜落した以上はやるしかない。フブキ、援護だ。」

「了解。」

ゴルメデに攻撃を仕掛けた。だがムサシに向かってゴルメデが攻撃した。ムサシはなんとかかわしたが、追い詰められてしまつた。目の前に崖が迫つていたのだ。

「しまつた、これ以上は・・・」

だが無情にもゴルメデに攻撃されてしまつた。

「うわあー！」

ムサシは崖に落ちてしまつたが諦めてはいなかつた。コスモプラックを手にしていた。

「ウルトラマンコスモース！」

すると、ムサシはウルトラマンコスモスとなつて、ゴルメデの前に降り立つた。

「ウルトラマンコスモス！？」

ハルカは憧れの存在を目の前に期待していた。

「あなた、どうしてコスモスのことを？」

「君はなぜここに？」

2人はハルカに聞いたがハルカは何も答えなかつた。

コスモスはファイティングポーズをとると向かつてきたゴルメデの攻撃をすべて受け流した。

お返しとばかりに手刀などといった相手を傷つけない攻撃を繰り出し、最後にルナホイッパーでゴルメデを投げ飛ばした。

そしてコスモスは、両手を体の前に持つてきたあとに両手を振り上げ、右手を突き出した。右手から虹色の光線、フルムーンレクトを繰り出した。

フルムーンレクトは、相手を沈静化させる慈しみの光線である。ゴルメデはすぐに大人しくなつた。

「ゴルメデが大人しくなつた。」

シノブが安堵の声を上げた。だが安心するのは、まだ早かつた。ゴルメデの頭上に虹色の光のウイルス、カオスヘッダーが現れたのだ。

「あの光は！？」

と言うドイガキの問いにハルカが答えた。

「カオスヘッダー！」

テックサンダーのコクピットでも・・・

「カオスヘッダー！？そんな今まで反応が無かつたはずだ！」

ヒウラがあることに気づいた。

「まさか、カオスヘッダーはこれを狙つていたのか！？」

カオスヘッダーはゴルメデから生命エネルギーを根こそぎ吸い取つた。

「ゴルメデの生命エネルギーが・・・。」

カオスヘッダーはコスモスがフルムーンレクトを放つてゴルメデが大人しくなるのを狙つていたのだ。ゴルメデがあまりに凶暴が故に

とりつくのは容易でないためだ。

カオスヘッダーはそれを元にカオスゴルメデを作り上げた。ゴルメデとの違いは頭部がカオス化を示す赤に変化していることだ。カオスゴルメデは、後ろにいるゴルメデに向かつて強力な破壊光線を放つた。ゴルメデはエネルギーを奪われかわす力すら残つていなかつたためにまともにくらい絶命してしまつた。それを見ていたコスマスはカオスヘッダーに激しい憎しみを抱き、次の瞬間、燃えるような赤い光に包まれ強さのコロナモードに変化した。

地上で見ていたハルカたちもその変化に気付いた。

「コスマスが変わった・・・」

「あれは、強さのコロナモードだ。」

コロナモードとなつたコスマスはカオスゴルメデに向かつて走つた。それに反応するかのようにカオスゴルメデもコスマスに向かつてきた。お互いは激しくぶつかったが力ではコスマスが勝つていた。コスマスは、すぐにパンチやキックといった攻撃技を繰り出し、カオスゴルメデを圧倒していった。

「何で強さだ・・・」

「さつきまでとはまるで違う・・・」

カオスゴルメデは反撃と言わんばかりに破壊光線を放つてきだがコスマスのサンライトバリアに阻まれた。コスマスはそのバリアをカオスゴルメデに向けて押し出し、カオスゴルメデを攻撃した。そしてコスマスは、両腕を頭上に掲げた後、胸の前で回転させて気を集め両腕を突き出した。そこから超高熱火炎の圧殺波動を繰り出した。コロナモードの必殺技、ブレージングウェーブだ。

カオスゴルメデは、まともに受けて爆発した。

「よつしゃ！！カオスヘッダーを倒した。」

「やつたー！コスマスが勝つたー。」

フブキとハルカが安堵の声を上げた。

「コスモスは戦いを終え、空に飛び去つて行つた。

戦いには勝ちはしたもののEYESの面々は「ゴルメテを救えなかつた悔しさを浮かべていた。

「ゴルメテを救えなかつたのは残念だな。」
とヒウラが旨を慰めるように言つた。

「ゴルメテを救えなかつたけど、ムサシ隊員も・・・」
ハルカは刺激しないように声をかけた。

「あ・・・あのー、私のことお聞きにならないんですか？」
ハルカは出過ぎた真似をしたことや自分のことを聞かないのか疑問に思つていたのだ。その時。

「おーい！」とハルカたちの後方からムサシが走つてきた。
「お前どうやつて助かつたんだよ。」

と突つかりながらフブキが聞いた。

「コスモスが助けてくれたんですね。」
それを聞いたハルカは（ムサシつて隠すの下手だな・・・）と思つた。自分がコスモスつて言つているようにハルカには聞こえたからだ。

ヒウラは軽く咳払いをして話を戻した。

「そういうえば君の事ちゃんと聞かないどだつたね。シノブからは助けてもらつたと聞いているが。」

「私の名前は、アマノ・ハルカです。出過ぎた真似をしてすみませんでした。」

「いや、ハルカちゃんは当たり前のことをしたの。謝る必要なんて・・・」

「僕もハルカちゃんに助けられたんだ。何も悪くないよ。」
とシノブとトイガキは責めないように優しく言つた。
「でもEYESの機体に触れたようなものですよ。」
とハルカは言つた。

「確かにそうだが、今回は不問にしておくよ、ハルカちゃん。」

「本当にすみませんでした……」

「だから……ハル力ちゃんは悪くないのに……」とムサシに言われたハル力を思わず赤面してしまった。憧れのムサシに優しくされたためだ。

「じゃあ皆無事だし、帰還するか。」

「了解！」

「ハル力ちゃん、家まで送るよ。」とムサシに言われたがハル力は困つたように答えた。

「あ・・あの私行くアテが無いんです。この世界の人間じゃないんですね。」

「どういうことなの？」

「私、パラレルワールドから来たんです。詳しいことは後で話します……。」

状況を理解できなかつたが、ヒウラは彼女を心配して提案した。

「このままトレジャー・ベースに来るといい。それに世界のことをよく知つてる少女つて君かもしれないから」のまま入隊つてのはどうかな？

その提案にムサシを除く全員が反対した。

「キヤップ。こんな子供を我々に加えるんですか？」

「そうですよ。今のは軽率だと私は思います。」

「こんな子供を危険な目に遭わせるんですか？」

しかし、ハル力は本気だった。

「私に出来ることがあると思うんです。だからこの世界に紛れ込んだのかも知れません。でも、やれることを精一杯やりたいんです！」

するとムサシが優しい笑みを浮かべながら言つた。

「分かった。僕も君なんじやないかつて思つてた。この世界をよく知る少女が。僕たちと共に頑張ろう。」

するとハル力はさつきよりも赤面してしまった。

「大丈夫？」とシノブに聞かれたがあまりのムサシの優しさで頭がいっぱいになつていた。

反対していた3人もハル力を認めた。

「これからヨロシクね。ハル力ちゃん。」

「意外なキヤップの人選だけどこれからよろしくハル力隊員。」

「まあ足手まといにはなるなよ。」

3人に言われたハル力は落ち着きを取り戻しEYES式の指を2本立てる敬礼をした。

「お、敬礼の仕方知ってるんだな。」とヒウラは感心した。

「ええ、何度も見ていたんで。」とハル力は得意げに返した。

「よーし、新入隊員も来たことだし帰還するぞ。」

「了解!!」

新たにハル力を加えたEYESはトレジャーベースに向け、帰還して行つた。

第1話「優しさと強さの英雄」（後書き）

TEAM EYESに入隊したハルカ。だがハルカは、世界の危機を知り使命の大きさを知る。

次回、ウルトラマンコスモス クロスオーバーワールド第2話「新たなる敵」

3つの世界を取り戻し、未来を切り拓け！

第2話「新たなる敵」（前書き）

この回で世界が融合したことが明らかになります。

今回の敵はスフィアです。

前回よりちょっと短めです。

ちなみに前回の後書きの「3つの世界を取り戻し、未来を切り拓け！」は、この物語のキャッチコピー的なものです。

第2話「新たなる敵」

カオスヘッダーとの戦いから2日が経っていた。

この2日はムサシ達がゴルメデを救えなかつたことに気持ちを整理する時間とハルカの気持ちの整理と入隊準備にあてられていた。

EYESの指令室には、真新しい隊員服に身を包んだハルカとムサシ達の姿があつた。

「本日付で入隊することになりました、アマノ・ハルカです。」

改めてハルカは自己紹介した。

「ハルカ、そんな堅苦しいことは抜きでいいぞ。」
とヒウラが言つた。

「そうそう。もっとリラックス、リラックス。」

とアヤノが同調するように言つた。アヤノとハルカは2日前に会つたばかりだがすでに打ち解けているようだ。

「はい。じゃあ・・・今日から隊員としてよろしくおねがいします！」

「今日からよろしく、ハルカちゃん。」

とムサシが言つたが、ハルカは全く動じなかつた。初めて会つた時は赤面していたが今は隊員としての自覚が赤面させていいようだ。ヒウラが席から立ち上がりハルカにこう言つた。

「ハルカ。何か抱負でもあるか？」

「はい。EYESでも、すべての怪獣が保護できるわけでもないことをゴルメデから教わつた気がします。でも、その努力を怠らずに全力で自分達に出来ることをやりたいです。そんな隊員に私は、いえ、全員がなるべきと思います。」

「そうだな、俺達はゴルメデを救おうとしたけど結果的には救えなかつた・・・でもその努力を怠つたらいけないよな。」

ハルカの言葉を聞いたムサシ達は改めて決意を新たにした。

そこでダイガキがハルカに声をかけた。

「ハルカちゃん、ちょっと見て欲しいものがあるんだけど。」「何ですか？」

すると、ダイガキは2枚の写真を持ってきてテーブルの上に置いた。写真には、銀色の球体のようなものが写っていた。

「この球体に關して聞きたいんだ。今までこの世界のどこにもいかつたんだけど、何か知ってる？」

2枚の写真に写っている物を見たハルカはダイガキに聞いた。

「ダイガキさん、これはいつから現れたんですか？」

「君がこの世界に来る1週間前からだよ。」

ハルカは敵の正体について伝えた。

「これは、宇宙球体スフィアです。」

「スフィア？」

とシノブが聞いた。

「ええ。ですがこれは私がいた世界ではコスモスの中には出てこなかつたんです。ウルトラマンダイナというコスモスとは別のウルトラマンの敵として出てきたんです。」

「ちょっと待て。ハルカがいた世界では何人もウルトラマンがいたのか？」

と疑問そうにヒウラが聞いた。

「そうですけど、ウルトラマンはシリーズ作品だったんです。30人以上はいますよ。」

「そんなにウルトラマンがいるのかよ。」

とフブキが驚いた。

「話を戻しますけどスフィアは、明確な意思をもって人類に挑戦しているんです。スフィアがその生物や物質を取り込むことによって生まれるスフィア合成獣を使って。」

とハルカは説明した。

「じゃあ、この世界には存在しないものだと？」

とダイガキが聞く。

「ええ。おやじくはダイナの世界との世界が交わってしまったと思います。」

とハルカが答えた。

その頃、宇宙球体スフィアがある怪獣を生み出していた。

周囲の岩石とマグマを取り込み、岩石怪獣グラーンを生み出した。

「ダイナと僕達の世界の融合なんとしても信じられないよ。」

「でも現に起ってしまった・・・立ち向かうしかありません。」

とハルカが言った。

するとドイガキが再び声をかけてきた。

「ハルカちゃん、それともう一つ聞いてもいいかな？」

「はい。私に答えられることなら。」

ドイガキはエイジヤーマックスを操作し、ある電波を見せた。
「」の電波もスフィアが現れた時と前後して発信されているような
んだけど・・・」

「時空波でしょうね。これもコスモスの世界に存在しないものです。」

「じゃあ、そのダイナの世界にはあったの？」

とシノブが聞くがハルカはそれを否定した。

「いえ、ダイナの世界にも存在しないんです。また違う世界のものです。」

「じゃあ一体どこの世界のものなんだ？」

とフブキが急かすように聞いた。

「フブキ。」とヒウラが注意した。

「この時空波はウルトラマンメビウスとこつまた違うウルトラマンマシン
が存在する世界のものです。」

とハルカは説明した。

「じゃあ、そのメビウスの世界も混ざりてしまってるの？」

とアヤノが聞いた。

「そうですね。それと私がいた世界も・・・。その原因を突き止め
て倒さないところの世界が滅んでしまいます。交わるはずのなかつた
世界が交わつてしまつたせいで。」

その言葉にEYESの全員が驚愕した。

「そ・・そな・・・・・。」

「世界が滅ぶつて・・・。」

「だから、私がこの世界に紛れ込んでしまつたのかもしません。
コスマス、ダイナ、メビウスの3つを知つている私だからこそ世界
を元に戻せるかもしないから。」

そこでムサシが口を開いた。

「そうだとしてもハルカちゃんだけが抱え込む必要は無いよ。」

「分かつて。だから私はEYESで自分に出来ることを精一杯や
るつて決めたの。皆と協力してね。」

ハルカは世界の現実を受け入れ、使命の大きさを実感した。

指令室に警報音が鳴り響いた。

「D5エリアに怪獣出現！」

とアヤノが伝える。

「メインモニターに出します。」

とドイガキが言いキーボードを操作して、モニターに映し出した。
モニターには「こつこつ」とした岩石がそのまま生物になつたような怪
獣が映し出されていた。体には赤いラインが入つている。

「この怪獣は岩石怪獣グラーン！スフィア合成功です！」

ハルカが伝えた。

「これがスフィア合成功・・・。」

「ええ。残念ですがスフィア合成功は倒すしかありません。EYES
の信念は理解していますが人類の進化を快く思つていらない存在な
んです。」

「じゃあ、心置きなくぶつ潰せるわけだな。」
とフブキが攻撃的に言つた。

するとアヤノが声を張り上げた。

「キヤップ、近くには高純度エネルギー貯蔵施設があります！」

「なんだと！？よし！なんとしても施設を守るぞ！EYES、出動

！」

「了解！」

ヒウラとフブキは1号機、シノブとディガキは2号機、ムサシとハルカは4号機に搭乗している。

現場に到着したのと同時に状況確認をした。

「エネルギータンクは無事です。しかしこれ以上はグラーレーンを近づけると危険です。奴は火炎放射しますから。」

とハルカが伝えた。

「了解。フブキ、ムサシが威嚇弾で怪獣の注意を引き付け、シノブが誘導弾でタンクから遠ざけるんだ。」

「了解。」

返答のあとすぐに1号機と4号機から威嚇弾がグラーレーンの足元に放たれ、2号機から誘導弾が放たれたがその進路が変わらなかつた。ヒウラは決断した。

「コンディションレベル・レッド、攻撃開始！」

その合図と共に3機からブライトレーザーが放たれた。グラーレーンは攻撃されるが全くひるむことなくテックサンダー3機に火炎放射で応戦してきた。3機は何とか攻撃を避けてることができた。

そこに宇宙球体スフィアが10体現れ、テックサンダーに攻撃をしてきた。

「各機、散開して回避するんだ！」

「了解！」

回避運動をとつた1号機と2号機は回避できたが4号機はわずかにそれが遅れ、被弾して墜落してしまった。

「きやあああ。」

4号機のコクピットに火花が飛び散りハルカは悲鳴を上げた。

「しました・・・」

4号機は地上を50メートルほど滑つてようやく止まった。ハルカは墜落の衝撃に耐え切れずに意識を失っていた。

「ハルカちゃん、しつかりして。」

しかし、ハルカは意識を失つたままだった。そこにキャップから通信が入った。

「ムサシ、ハルカ、応答しろ！」

ムサシが左腕に装着されている小型通信機EYESペーサーでヒュラに返した。

「キャップ、僕は大丈夫ですがハルカちゃんが気を失つてるんです！」

「何！？シノブ、ドイガキは4号機の防衛を頼む。」

「了解！」

「フブキはグラーレーンに攻撃！エネルギータンクを守るんだ！」

「了解！」

2機からブライトレーザーがほとばしった。

4号機の中にいるムサシは、コスモブラックを取り出してコスモスに言った。

「コスモス、僕はスフィアが許せない。ハルカちゃんをこんな目に遭わせたんだ。皆を守るために行こう！」

すると、コスモスもそれに応えてくれた。

「私も君と共に守るために戦いをする。」
ムサシはコスモブラックを手にした右手を振り上げ、先端が開かれ

た。

「コスモオオオオス！――！」

グラーレーンの前に青き巨人、ウルトラマンコスモスが降り立つた。

「コスモス！」

とシノブが期待の声を上げる。

コスモスはすぐにコロナモードにチェンジし、グラーンに向かつた。グラーンはコスモスに対し、火炎放射をしてきた。コスモスはそれをジャンプすることでかわし、グラーンの進行を阻むべく押さえ込んだ。コスモスがグラーンの体に触れた瞬間赤いラインが輝き高熱を発した。コスモスは手を火傷し、グラーンから離れたがすぐに攻撃をした。コスモスのパンチやキックなどの連続攻撃にグラーンは徐々にタンクから遠ざけられていった。

「コスモスは、タンクに気づいて遠ざけさせてるんだ。」

とドイガキが解説した。

「よし、グラーンをこのまま遠ざけさせるぞ!」

とヒウラが指示を飛ばした。

「了解!」

テックサンダーがコスモスへの援護射撃のブライトレーザーを放つた。グラーンは追い討ちをかけられ、エネルギータンクから完全に遠ざかつた。

その隙にコスモスは必殺技のブレージングウェーブを放った。

しかし、コスモスとEYESは驚愕の光景を目にした。ブレージングウェーブがバリアに完全防御されたのだ。

コスモスが愕然としている隙にグラーンは火炎放射を放つてきた。コスモスはサンライトバリアで防いだがカラー・タイマーが鳴り始め、徐々に後方に押された。

コスモスは地上では3分間しか活動できないがコロナモードで戦っているためにエネルギーの消耗が激しいのだ。

「コスモスが押されてる。援護だ!」

「了解!」

テックサンダーからブライトレーザーが放たれ、火炎放射をしていたグラーンはまともに喰らった。グラーンは後方に押しやられ火炎放射を解除せざるを得なくなつた。コスモスもサンライトバリアを解除し、ブレージングウェーブと違うモーションをとつた。両腕に宇宙エネルギーを集結させ、両腕を交差させて光線を放つた。

「コスモスコロナモードの最強の技であるネイバスター光線だ。

グラーンはバリアを展開させて防御したが、コスモスが放った光線の膨大なエネルギー量にバリアがガラスのように割れ、グラーンに命中し爆発した。

「よつしゃ！」

「やつたー！」

とフブキとドイガキが歓声の声を上げた。

コスモスは戦いを終え空に飛んでいった。

「それにも凄いエネルギーね。」

とシノブが驚きの声を上げた。

「さすがにあれだけのエネルギーを防御しきれなかつたんだ。」

とドイガキが解説した。

「すぐにムサシとハルカの救助だ。」

とヒウラが指示を飛ばした。

「了解！」

宇宙球体スフィアは負けを認め姿を消した。

戦闘を終え、コスモスの姿からムサシの姿に戻つていた。

ムサシは墜落した4号機に戻り、ハルカを機体から恥ずかしながらおぶつて降ろした。

「ごめんね・・・ハルカちゃん。こんな目に遭わせて・・・」

と呟いたがハルカからの返事は無かつた。意識があれば「気にしないで、ムサシ。」と言うのだろう。

「おーい、大丈夫かー？」

とヒウラが叫んでいた。

ムサシは右手を挙げて居場所を伝えた。すると全員がムサシの元に集まってきた。

「ハルカちゃんは？」

「たぶん打撲とかしてると思うんですが大して怪我していないと思います。」

「そうか。一応メディカルセンターに連れてくか。」

「そうですね。」

ムサシたちは、トレジャー・ベースに向け帰還していく。

「ムサシ、ハルカちゃん大丈夫なの？」

とアヤノが心配そうに聞いた。

「うん。打撲したのと墜落のGに耐えられなかつたみたいで大したこと無いつて。」

と安心させるようにムサシが答えた。

その会話が聞こえたのかハルカは意識を取り戻した。

「ここは・・・？」

「気がついた？」とアヤノが聞いた。

「良かつた。意識が戻つて。」とムサシが胸を撫で下ろした。ハルカは体を起こして改めて聞いた。

「ここは・・・いつたい・・・」

その問いにアヤノが安心させるように答えた。

「メディカルセンターだよ。怪我は打撲だけで大したこと無いつて。」

「そうですか。」

「ごめんね。怪我させちゃつて。」

とムサシが謝罪した。

「気にしないで、ムサシ。こういうのも防衛隊らしくつていいじゃん。」と笑顔で返した。

そこにヒウラ、シノブ、フブキ、ドイガキの4人が入つてきた。

「お、意識戻つたみたいだな。」

とヒウラが言つた。

「ええ。おかげさまで。」

「ハルカちゃん、いい事教えてあげよつか？」

とドイガキが不適な笑みを浮かべながら言つた。

「いい事つてなんですか？」

「ハルカちゃんのことをムサシがおぶつて降ろして来たんだよ。」

「ちょっと、ダイガキさん！それは言わないって言つたじやないですか！」

と慌てた様子でムサシが注意した。

ハルカは思わず赤面してムサシ達から田線をそらし、布団の中に潜り込んだ。

「ハルカ隊員つたら恥ずかしがつてるわよ。どうあるの、ムサシ隊員。」

とシノブが言った。

「えええ、僕ですか！？」

「なんとかしろよ。ムサシ。」

「そうよ。しつかりしなさいよ。」

とフブキとアヤノが言った。すると布団からハルカが出てきた。

「ムサシ、ありがとう。」

「あ・・え・・・いや、とにかく良かったよ無事で。うん。」

ヒウラが軽く咳払いしてハルカに聞いた。

「ハルカ、明日から復帰できるな？」

「大したこと無いので大丈夫です。」

ムサシ達とハルカの間に確かな絆が生まれていた。

第2話「新たなる敵」（後書き）

大熊山に現れたバードン。コスモスは立ち向かうが猛毒をあびてしまい、ムサシもその影響を受けてしまう。かつてウルトラマンを倒したバードンにEYESは、コスモスは、立ち向かえるのか。次回、ウルトラマンコスモス クロスオーバーワールド第3話「逆境を打ち破れ！」

3つの世界を取り戻し、未来を切り拓け！

第3話 「逆境を打ち破れ！」（前書き）

なんか、カードゲームのサブタイみたいですがそれなりに仕上がりました。
ちょっと長めになっています。

第3話 「逆境を打ち破れ！」

ハルカがEYESに入隊してから1週間が経ち、ようやく基地内を把握してきたようだ。

指令室にはヒウラ、アヤノ、ハルカの3人がいてそれぞれのデスクワークを行っていた。シノブとフブキとドイガキとムサシは、先に昼休みに入っていた。EYESは人数が少ないためにこうして順番に休憩を取っているのだ。時には、全員で休憩することもあるが。ヒウラがEYESペーサーに付いている時計を確認した。すでに12時半を回っている。

「アヤノ、ハルカ、そろそろ休憩に入つていいぞ。」

「はい。」

とハルカが返事をした。

「ハルカちゃん、一緒にご飯食べない？」

とアヤノが笑顔で聞く。

「そうですね。1人より2人の方が楽しいですもんね。」

と笑顔でハルカが返して2人は指令室を出て行つた。それと同時に先に休憩に入つていた4人が戻ってきた。

戻つてくるなりトイガキが口を開いた。

「あの2人、仲がいいんですね。」

「あの2人は年も近いし、女の子同士だから気が合つんですよ。僕も年は近いですけどね。」

とムサシが言つた。

「でも彼女の情報が役に立つてるのは事実ですよね。」

とシノブがハルカを褒めた。

「お子ちゃんのくせにどっちが本性なんだか・・・」

とフブキが皮肉交じりに言つた。

「そうだよな。ハルカちゃんは、凄いと思う。さすがファンというだけはある。」

とヒウラも褒めた。

「では、今後も活躍してもいいって？」

とシノブが聞いた。

「ああ、でも彼女の話も聞かないといけない。決めるのはハルカちゃんだからな。」

食堂では、アヤノとハルカが楽しそうに食事をしている。アヤノとハルカはミートスパゲティを食べている。

「ハルカちゃん、EYESに入つてどう？」

「意外と緊張しないんで気持ち的には楽です。でも飛行訓練が慣れませんね。」

とハルカが感想を言った。

「そつか。私達、キヤップがあんな感じだから緊張しないんだろうね。でも飛行訓練が慣れないのは一緒だよ。」

「アヤノさんもですか？」

「うん。普段はオペレーターだからね。でもリーダーの指導でなんとかだけど。それと、あたしのこと、さん付けしなくていいよ。」

とアヤノが同調と注意をした。

「じゃあ・・・アヤノ・・・」

と戸惑いながら言った。

「それでよし。あ、そろそろ休憩も終わりだね、戻ろつか。」「戻りますか。」

「ただいま戻りました。」

とアヤノが伝えた。

「戻りました。」

とハルカも伝える。

「お、噂の2人が戻つて來たな。」「ヒウラがからかった。

「噂の2人？」

とアヤノとハルカが同時に首をひねった。

「ああ、気にしないで。こういうのキャップの余興だから。」

とシノブが言った。

「それにしても仲いいよね、アヤノちゃんとハルカちゃんは。」

「ちょっと、子供扱いしないでよ！ムサシ隊員！」

とアヤノがムサシに詰め寄った。

「ちゃんとアヤノ隊員と呼んでよ！アヤノ隊員と…」

すると、ハルカがくすくすと笑っていた。

「どうしたんだ、ハルカ。」

とヒウラが声をかけた。

「いや、私の世界でもこんなやりとりがあつて、変わつてないなと思つて。」

「コスマスの中で？」

とシノブも聞いた。

「ええ。ほんとあのまんまですよ。」

とハルカが答えた。

そこに警報音が鳴り響いた。

アヤノは席に戻りすぐにエイジヤーMAXを操作し、状況を伝えた。

「大熊山に怪獣出現！メインスクリーンに出します。」

メインスクリーンに赤を基調とした体と羽根を持ちくちばしの付け根の辺りから左右にふくろのようなものがぶら下がつている巨大な鳥が映し出された。

「これは、火山怪鳥バードンです！でもこれはメビウスの世界の怪獣のはず。」

とハルカが伝えた。

「これも世界が交わつてしまつた影響で現れたんじや。」

とドイガキが懸念した。

「そうです。バードンは危険な怪獣です。」

「どう危険なんだ？」

とフブキが聞いた。

「あいつは、猛毒を有しているんです。市街地に出てしまつ前に対処しないと大変なことになつてしまいかねません！」

とハルカが伝えた。

「よし、市街地に出る前に被害を防ぐ！TEAM EYES出動！」

「了解！」

今回も前回と同様に1号機にヒウラとフブキ、2号機にシノブとドイガキ、4号機にムサシとハルカが搭乗している。

「テックサンダー、大熊山上空に到着。」

とフブキが伝える。

「ムサシとハルカは逃げ遅れた人がいないか探してくれ。」

とヒウラが伝えた。

「了解。」

と同時に返事をし、4号機は着陸した。

「1号、2号は威嚇弾でバードンの進攻を阻止する。」

「了解。」

返答と同時に2機から威嚇射撃が放たれた。

「威嚇射撃が始まった。急いで探さないと。」

とムサシが言った。

「そうだね。と言つても人気が無いね。誰も居ないのかな。」

「うん。本当に誰も居ないのかな？」

しばらく歩くと衝撃の光景があつた。さつき居たところは木が生い茂つていたのだが今居る場所には立ち枯れが起こっているのだ。

「ハルカちゃん、これは？」

「これもバードンの影響。バードンの猛毒で立ち枯れが起きてるの。」

「次の瞬間、バードンがムサシ達に氣づき攻撃してきた。

ムサシとハルカは左右に分かれて回避した。

「キャップ、バードンが！」
「トイガキが叫んだ。

「ムサシ隊員、地上に人はいるの？」

とシノブが通信を飛ばした。

「いえ、誰もいません。」

「わかつたわ、すぐに機体に戻つて。」「了解！」

「フブキ、シノブ、トイガキ、2人の時間稼ぎをするぞ。攻撃開始！」

とヒウラが指示を飛ばした。

「了解！」

2機からブライトレーザーが進つた。

「ハル力ちゃん、キャップ達が時間を稼いでくれてる。今のうちに4号機に戻るんだ。」

と言つとムサシはバードンの方向に向かつた。

「ムサシ、どこ行くの？」

「バードンと戦う。先に言つてて。」

ムサシはハル力が自分がコスモスだと言つことを知つてゐるのと誰にも漏らさないということを約束してゐるためにあえて言つた。ムサシの後ろ姿を見ていたハル力は胸騒ぎがしてゐた。

ムサシは人気の無い場所でコスモブラックを取り出し、真上に振り上げた。

「コスマオオオオス！！！」

すると、バードンの前に光の柱が現れ、その中からウルトラマンコスマスが現れた。

「コスマス！」

とハル力が期待の声を上げる。

「コスモスがファイティングポーズを取ると同時にバードンが巨体で風起こしをしてきた。あまりの強さに周りが見えなくなるほどになっていた。コスモスはそれを連續バック転で回避した。5回ほどしたところでコスモスがバードンを見ると火炎放射をしてきたがコスモスは上空へ飛ぶことで回避したが次の瞬間バードンのくちばしがコスモスの腹部を直撃し猛毒がそこから入ってしまった。

「ムサシ！」

思わずハルカはムサシの名を叫んでいた。彼女の胸騒ぎが的中してしまったのだ。

「キヤップ、コスモスが！」

「援護だ！コスモスを援護だ！」

「了解！」

ブライトレーザーがバードンに直撃し気がそがれたのか空に飛んで行つた。コスモスは地面に着地したがうつ伏せに倒れるようにして消えてしまった。

ハルカはコスモスが消えた方向めがけて走り出していた。バードンの猛毒をもろに受けたためにムサシの安否を気にしているのだ。しばらく走るとムサシがうつ伏せの状態で倒れていた。

「ムサシ、しつかりして。」

だがムサシは目の人にくまを浮かべ、大量の脂汗に苦しそうに「はあ・・・はあ・・・」と荒い息をしていた。

そこにヒウラから通信が入つた。

「ムサシ、ハルカ、無事か？」

ハルカは我を忘れたような声で答えた

「キヤップ、ムサシが！」

ただならぬことを感じたヒウラ達は、ハルカにムサシを乗せて4号機を操縦するように伝えて3機はトレジャーベースに帰還した。

バードンの猛毒をあびたムサシはすぐにメディカルセンターに収容され治療を受けた。

アヤノが指令室に戻るとヒウラが声をかけた。

「どうだ、ムサシの容態は。」

「治療を受けて、安定してるそ'です。ハルカ隊員が向こうにいます。」

「ハルカちゃんが1人で？」

と心配そうにヒウラが聞いた。

「ええ。私も一緒にと言つたなんですが、戻つて下さいと言われて。」

「ハルカちゃんも辛いはずなのに・・・。」

「キヤップ、ハルカ隊員のところに行つたらどうですか?」ここは私達がやるので。」

とシノブが親切に言つた。

「そうだな。でも俺だけじゃ気を使わせるだろ?からアヤノも。」

「分かりました。」

そう言つて2人はハルカの元に向かつた。

病室にはベッドに横たわるムサシと看病しているハルカの姿があつた。だがハルカはムサシをこの状況に追い込んでしまつたことを悔いて、涙を浮かべていた。

「ムサシ、ごめん・・・。」

そこにアヤノとヒウラが入つてきた。

「ハルカちゃん、大丈夫?」

と刺激しないようにアヤノが声をかけた。

「キヤップ、アヤノ隊員。」

と涙を隠して答えたつもりだったがどうやら隠しきれていなかつたようだ。

「ハルカちゃん、泣いていたのか。」

「い・・・いえ、泣いてなんか・・・。」

とハルカは氣丈に振舞つたがヒウラは本心を見抜いていた。

「我慢しなくていいぞ。辛いんだる、こんな目に遭わせたことが。」

「1人で抱え込まなくていいんだよ。ハルカちゃん。」

「キヤップ、アヤノ隊員。」

それからしばらく沈黙の時が流れた。だがこの時間はハルカが気持ちを落ち着けるのに十分だったかもしれない。

「私、向こうの世界でも見たんです。こういう場面を。」

「そうか、だから少しは分かつていたのか。」

「でも見たのはメビウスの中です。まさかこの世界で！？とも思つてる自分もいます。」

「でもムサシは大丈夫だよ。悪運だけはものすごく強いんだよ、彼は。」

と笑顔でアヤノが言った。

「それ、知つてますよ。悪運の強さには笑っちゃいますよ。」

と皮肉そうにハルカは答えた。

「お、いつものハルカに戻つてきたな。」

「そうですね。」

と2人がハルカの様子の変化に気づいた。

「そうですか？」ときよとんとした顔でハルカは聞いた。

「うん。もどつてるよ。もう遅いし、ここは私が見てるから寝た方がいいよ。」

ヒウラが時計を確認して同調するように言った。

「そうだな、もうこんな時間だしアヤノに任せた方がいいな。」

「じゃあ、お願ひします。」

「任せて、ハルカちゃん。」

アヤノが答えると2人は病室を出て行つた。

翌日、EYESの指令室でバードンに対する作戦会議が行われていた。そこにはハルカの姿もある。

ヒウラの配慮で休んでもいいと言われたが、ハルカをこれを拒否したのだ。自分のやれることをやりたいと言つて。

「でどうするんだ？コスモスでもしとめられなかつたんだ。」

と真っ先にフブキが口を開いた。

ハルカの意見を参考にしたいと考えたヒウラはハルカに意見を求めていた。

「ハルカ、何か手立てはあるのか？」

「バードンは私のいた世界でも強敵怪獣として描かれてました。ウルトラマンを倒したことだつてある。」

その言葉に暗い空気が流れた。

「ウルトラマンは勝てなかつたの？」

とシノブが聞く。

「いえ、最初は勝てませんでしたが再戦で何とか勝ちました。」

「じゃあ、問題はないんじゃないのか？」

とフブキが聞いた。

「奴を倒すとなると倒した際に飛び散るかも知れない猛毒を考えないとなりません。なるべく隔離できるところで倒さないといけませんがほかにも手立てはあります。ただ、それは厄介なんです。」「どういうことだ？」

「奴の頬袋の静脈を狙撃するんです。これには精密射撃が必須事項です。」

「面白い、俺がやる。」

とフブキが真っ先に答えた。

「フブキさんがやるなら問題は無いですね。EYESーのバイロットですからね。」

「さすがね、ハルカ隊員。」

とシノブが褒めた。

そこに警報音が鳴り響いた。

「バードンです！場所は大熊山です！」

とアヤノが伝えた。

「よし、ハルカが立案した作戦で被害を防ぐ！」

そこに病院服姿のムサシが入ってきた。それにハルカがいち早く気づきムサシの体を支えた。

「僕も出撃します。」

「ムサシ、その体じゃ無理だよ。」

「お前は黙つてろ。病人がいても足手まといになるだけだからな。」

とフブキは冷たく言つたが彼なりの優しさもある。

「しかし・・・」とムサシが出撃しようとしたがヒウラがそれを止めた。

「心配するな。ハルカが凄い作戦を立ててくれた。」

「ハルカちゃんが？」

「うん。大丈夫。私達がやるから。」

そうハルカが言うとムサシは引き下がつた。

「よし、EYES出動！」

「了解！」

前回の出撃と同様に出撃した。だが4号機にはハルカだけが搭乗している。

大熊山に到着したEYESはすぐに作戦行動に入った。

「ハルカの作戦通りに行動する。2号機、4号機はバードンの進攻を阻止しつつ隙を作ってくれ。」

「了解。ハルカ隊員行くわよ。」

「いつでもどうぞ。」

「ハルカ、分かってると思うが感情的になるなよ。」

とヒウラが念を押した。

「大丈夫です。」と短く答えた。

2号機から威嚇弾、4号機からブライトレーザーが迸つた。だがバードンも火炎放射で応戦してきた。3機は散開して回避して、再び役割を果たして行つた。

「今度は絶対にやらせない！」

その間にフブキはチャンスをうががつていた。

指令室では、バードンとの戦闘をムサシが見ていた。アヤノはオペレーターの役割をしているためにモニターを見てはいなかつた。何

度も回避したり、攻撃したりの繰り返しを見ていてムサシはいてもたつてもいられなくなつた。ムサシは無言で司令室から出て行つた。「ムサシ、どこ行くの?」とアヤノが言つたがムサシはためらわずに出て行つた。

ムサシは、トレジャー・ベースの外に出てきてコスモブラックを取り出し、真上に振り上げた。

「コスマオオオス!!!!」

ムサシはウルトラマンコスモスとなり、仲間の元へと向かつて行つた。

「くそ! これじゃきりがない!」

とフブキが毒づいた。

「もう少しだけ待つて!」

とハルカが叫んだ。

そこにコスマスが現れた。だが、まだ毒が残つているのかカラータイマーがすでに点滅している。

「コスマス・・・まだダメージがあるのに。」

とハルカが呟いた。

コスマスはコロナモードにチェンジし、バードンに向かつた。バードンは火炎放射で応戦してきた。コスマスは、それを回避して、パンチやキックで応戦した。コスマスの素早い攻撃にバードンは反撃することが出来なくなつていた。

「コスマスは戦い方を変えている。」

とヒウラが気づいた。

ハルカはブライトレーザーで援護した。

「コスマス、あなたは1人で戦つてるんじゃない。みんながついてる!」

4号機の攻撃にバードンが後方に押されていた。そしてコスマスは、ソーラーブレイブキックを繰り出しバードンを押さえ込んでこう言

つた。

「撃て。」

「フブキ今だ！」とヒウラも続いて言つた。

「発射！」

1号機の攻撃は見事静脈に命中し、バードンが苦しみだした。そこにコスモスはバードンから離れ、ブレージングウェーブを放ち、バードンを倒した。

「やつたー！」

とハルカが喜んだ。

「ハルカ、よくやつたな」

「ありがとうございます。」

コスモスはハルカにサムズアップした。ハルカもそれで返した。コスモスは空に飛んで行き、EYESも帰還していった。

翌日、ムサシは無事に退院し復帰してきた。

「無事に退院して何よりだ。」

とヒウラがムサシに言った。

「よかつたよ。ムサシ。」

アヤノも同調した。

「ハルカ隊員、ずっと心配してたのよ。」

「そうなんですか？」

とムサシは聞いた。

「でも悪運だけは強いからね、ムサシは。」

とハルカは答えた。

「なんだよ、悪運つて。」

「それ以外にどう言えるの？」

「それは・・・と言葉に詰まってしまった。」

「まあ、いいじゃないか2人共。」とドイガキが間にに入った。

「つたく心配させやがって・・・」

とフブキが呟いた。

「そういうフブキさんこそ嬉しいんじやないですか？」

「何だと？俺はそこまで暇じゃないからな。」

とハルカの言葉に反発した。

「照れちゃつて。」

とハルカは呟いた。

ハルカはEYESの隊員として、戦う決意を新たにした。

第3話 「逆境を打ち破れ！」（後書き）

茧が村に現れる力オスヘッダー。だが力オスヘッダーは有機物だけでなく無機物をも怪獣とする能力を持ち合わせていた。故郷が危機にさらされたフブキは力オスヘッダーに刃を向ける。

次回、ウルトラマンコスモス クロスオーバーワールド第4話「茧が村の決戦」

3つの世界を取り戻し、未来を切り拓け！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5458z/>

ウルトラマンコスモス クロスオーバーワールド

2012年1月5日21時48分発行